

4-1 「歴史」の教訓

「歴史はくりかえす」という有名な歴史観は、カール・マルクス（ドイツの経済学者）のものとして知られていますが、マルクスはヘーゲル（ドイツの哲学者）の言葉を引用しているにすぎません。マルクスによれば、ヘーゲルは「最初は悲劇として、二度目は笑劇として」ということを言い忘れているとつけ加えたのでした。それはさておき、こうした歴史観は、早くも古代ローマにまでさかのぼります。

□ *History repeats itself.*

歴史はくりかえす。

—Quintus Curtius Rufus (クルティウス・ルルス: 1st Century)
古代ローマの歴史家

「歴史はくりかえす」のだとしたら、人間は同じ間違いをくりかえすのでしょうか。

□ *History teaches us the mistakes we are going to make.*

歴史はわたしたちがこれから犯すだろう過(愆)ちについて教えてくれる。

—Laurence Peter (ローレンス・ピーター: 1919-1990)
カナダの教育学者

□ *History is a vast early warning system.¹*

歴史とは、巨大な早期警報装置である。

—Norman Cousins (ノーマン・カズンズ: 1915-1990)
アメリカのジャーナリスト

くりかえされる歴史から教訓を得なければ、わたしたちは過ちをくりかえすようです。歴史のなかにこそ、未来の設計図があります。

他方、歴史はくりかえさないと説く人もいます。

□ *History doesn't repeat itself—historians merely repeat each other.²*

歴史はくりかえさない。歴史学者たちが互いの学説をくりかえしているにすぎない。

こうした見方があるいっぽう、そもそも「歴史は勝者によって書かれる」(*History is written by the victors.*) ものだから、そんな歪曲された歴史を学んでもしかたないと力説する人たちがいます。歴史とは「勝てば官軍」を謳歌する者たちによって書き記された虚像のロマンであるから、そんなものから学んでもなんのご利益もないということです。それどころか、わたしたち人間は歴史の教訓から学べないのだと主張する声もあります。

□ *Winners take all.³*

勝てば官軍。

□ *That men do not learn very much from the lessons of history is the most important of all the lessons that history has to teach.⁴*

人は歴史の教訓からあまり多くのことを学べないものであり、この事実こそ、歴史の教える教訓のうちでいちばん大切なものだ。

—Aldous Huxley (オルダス・ハクスリー: 1894-1963) イギリスの作家

語句注

1. vast 「巨大な」 a warning system 「警報システム」 2. merely 「たんに……・ただ(……にすぎない)」 3. 英語では「勝者がすべてを奪う」という言い方をします。 4. That SV is … 「～であることは……だ」(この“that”は名詞節を導く接続詞) lesson 「教訓」

4-2 「近代日本人」と「英語」

外国人がたくさんいるぎつぱらんな席で、「日本人のイメージを聞かせてほしい」(What do you think about Japanese people?) といったら、「日本人の90パーセントは日本人が嫌いですね」(Ninety percent of Japanese hate being Japanese.) とこたえたアメリカ人がいました。たしかに日本人の悪口をいう日本人は多いですね。謙遜しているがゆえにそう見える人もいるでしょうが、なかには本気の人もいるようです。

☞ *To put it frankly, Japanese people today want to be white.*¹

はっきり言えば、近代日本人は白人になりたいわけですよ。

—岸田秀 (1933-) 心理学者

岸田秀いわく—

《日本人は黒船に「強姦」されたのです。以来、日本人は西洋コンプレックスをもつに至り、白人になりたいという願望をもって、この「近代」を生きてきたのです。たとえば、ヨーロッパを訪れた日本人の男は憑かれたように白人女性を抱きたがりますが、あれは白人に近づくための「一種の強迫的儀式」です。しかし、どう頑張ってみたところで、日本人は白人にはなれっこありませんから、「欧米に対して日本はいつまでも劣者」のままです。アジア、とりわけ朝鮮に対する日本人の態度もこれで説明がつかます。つまり、「白人と同一視した自分のイメージと、白人になれない自分との分裂、そこからくる屈辱感をごまかすために、劣等な日本人を日本人以外のどこかに発見せざるをえない。それを朝鮮に見出したわけ」です。それが証拠に、「日本文化の形成における朝鮮の役割についての近代日本人の過小評価はひどいもの」です。そうした理由があって、近代日

本人は日本人であることに自信をなくし、またみずからを嫌いになったのです。》
—『物語論批判』

このことは、日本人の「英語コンプレックス」にもあらわれています。英語支配の構造は、インターナショナルリズムに見えて、そのじつ英米人にとってのナショナルリズムであるとみなす研究者がいます。言語学者の田中克彦は「既存の言語はすべて特定の民族と国家の権力と威信に結びついており、またそこで作り出された強力な言語的首都の存在は、絶え間なく非母語の話し手を差別し、おどしけるのである」(『国家語をこえて』)と述べています。

言語の世界分布図は「帝国主義の夢の跡」(富岡多恵子)であって、まことに「言語は権力である」(大石俊一)といわざるをえません。言語コンプレックスは、英米人という「高級人種」に対するコンプレックスとからみあって、日本人の劣等意識をさらに刺激しています。英語という言語のなかに、支配・抑圧・差別を見るいっぽうで、憧憬・崇拜・羨望をもつという、いわば反対感情が共存するアンビヴァレントの心理状態にいる日本人がいまもたくさんいます。

英語習得そのものを到達目標にしてしまうと、いつまでたっても英米人のように英語をしゃべれない自分に劣等感をもつこととなります。英語は「手段」とわりきって、「道具」のように使ってみてはいかがでしょうか。

☞ *No matter how hard you study, you will not be able to speak English like a native speaker and you don't need to, either. English is just a communication tool.*²

どんなに一生懸命勉強しても、ネイティブ・スピーカーのように英語を話せるようにならないし、またその必要もない。英語はコミュニケーションの道具にすぎないのだから。

語句注

1. to put it frankly 「率直に言えば」 2. no matter how ... 「どんなに……であっても」